# 先生の目の輝き

飯沼賢司

渡辺澄夫先生に初めてお目にかかったのは一九八七年の六月の終わりころである。私は、六月一日付で大分県教育委員会に採用され、長年住み慣れた東京を離れ、大分県宇佐風土記の丘歴史民俗資料館に赴任した。それから三週間ほどして資料館運営協議会が開かれ、そこで、会長を務める先生にお目にかかったのである。それまで、先生のさまざまな業績には接しており、初対面とは思えなかったが、先生の方も竹内理三先生の弟子ということで、前任者海老沢衷氏同様に頑張るよう励ましてくれた。

それから、運営協議会や国東半島荘園村落遺跡調査の調査委員会や大分県地方史の例会・大会など頻繁にお目にかかり、さまざまな話をするようになった。いつも、少年のような好奇心に溢れる目をして、「飯沼君、高崎山はどこの郷に入ると思うかね」などと先生自身から質問してくるのである。私が先生に質問する立場であるが、先生から聞かれることの方がはるかに多かったように思う。先生は過去の話をすることは少なく、常に新しい関心を見い出し、前進してゆく人であった。

一昨年五月には、先生のライフワークのまとめともいえる『豊後国荘園公領史料集成』八巻(十二冊)が完結した。しかし、先生は、仕事はここに止まらず、それまでの史料作成の成果を『大分県地方史』『先哲史料館紀要』に発表されるとともに、この史料集をより使いやすくするため、索引の作成を開始した。私も、緒方英夫氏とともに微力ながらこれを手伝うことになった。さらに、昨年春、六郷満山の史料集を作成したいとお話があり、私も集めている史料を提供し協力することを約束していた。先生の学究の心は止まるところを知らなかった。

そんな矢先、奥様が亡くなられ、先生も後を追うように旅立たれてしまった。私と先生とのお付き合いは十年余とほかの皆様に比べれば随分と短いものであった。しかし、先生の新たな発見を求める目の輝きは私の心を離さない。因縁というか、一九九三年から先生の強い推薦で別府大学の先生の研究室の後任を引き受けており、今、先生のお仕事をどのように受け継いで行くのか、ひしひしと重みを感じている。私は、当面、先生の残された『豊後国荘園公領史料集成』八巻(十二冊)の索引と六郷山史料を引き継ぎ刊行することがその責務であると考えている。しかし、そのことよりも、好奇心に満ちたあの目の輝きを受け継ぐことが先生の最も望まれていることだと思うのである。

(別府大学教授)